

「底が突き抜けた」時代の歩き方 346

革命によって強固なピラミッド体制を築き、

「新しい人間」の出現を阻止するスターリニズム

《モスクワの赤い広場にひとつの霊廟があり、そのなかにレーニンの遺体が横たえられている。私は、このような公然たるロシア革命への侮辱、人民の新しい世代への侮辱、進歩する人間精神への侮辱、未来の無階級社会に対する侮辱が、ひとびとの批判もなしに数十年もつづけられてきたことのなかに、ピラミッドの体制の驚くべき、怖るべき重さを知って、歯がみせざるを得ない。ひとりの人間の屍体は、死特有の敬虔な感情をもたらすが、たとえその敬虔な感情がどれほどの幅と鋭さをもった深い印象を参観者の胸裡に与えるとしても、それが過去へ向つての哀惜であり、畏敬であり、行きどまりの感情であつて、なんら認識とつながることのないことは、カトリックの聖者たちの遺体がわれわれの薄明の帳の前に幾度も置かれたヨーロッパの歴史のすでに証明するところである。私は、赤い広場の行列のなかに立っていたひとりの痩せた、背の高い、ちょうど二十になつたかならぬぐらいの青年が仄明るい霊廟のなかへはいつて、棺のなかに横たわっているレーニンの眼を閉じた顔をやや遠くから認めた瞬間を想像する。彼は、写真で見慣れていた顔とまったく同一の顔がそこに眼を閉ざしている驚きと死者が自然に惹き起す敬虔の感情につつまれて、そこから眼を離すことができず、棺へ歩一歩と近づいてゆく。この数瞬は、彼のレーニンについての断片的な想念、彼をめぐる周囲の厳肅な雰囲気、などが渾然とまじりあつて、その敬虔な気分をさらに深めている瞬間である。そして、彼が蒼白い死者の顔を真上から覗きおろすとき彼は最も深い感情につつまれるが、それは、彼が死者の顔を認めた最初の瞬間覚えたものと同一のものである。この最後の瞬間がきてしまえば、彼はもはやそこに長く停つていることはできない。彼の敬虔の感情は、彼が長く死者の顔を凝視めづづけていればいるほど、退潮しはじめる以外になくなつてくる。何故なら、その敬虔の感情は、過去へ向つての行きどまりだからである。レーニンとは、何か。新しい歴史の一頁を開いたレーニンとは、何か。私は、レーニンはただ一揃いのレーニン全集のなかにおいて、そのほかの何処にも見出せないと、断言する。(…)私は、聖書のみ信じたルーテルと同じ口吻を弄したが、私とルーテルとの差異は、われわれが過去へ向うのではなく、われわれはレーニンを読むことによつてレーニンを知り、レーニンとなり、そしてレーニンを追い越すという認識の発展の方法をもっているところにある。そして、それこそが革命の方式である。革命は、古い制度の打倒にとどまらず、古い制度にまったく支配されぬ新しい人間の創出が目的なのだ。

レーニンは、過渡期の時代に前時代からの権力機関を用いることについて後ろ向きの部分を切りすて前向きの部面を用いることを執拗なほど強調しているが、それは、新しい世代が新しい制度に習慣づけられてゆく決定的な重要性はいくら繰り返しても足りないほどであることを知っていたからである。支配と服従のない共産主義社会、とわれわれはいうが、そこへの推移には、ただに生産力の増大と教育の全的普及にとどまらず、あらゆる制度、あらゆる機構、あらゆる思考法に、新しい世代からより新しい世代へ、前向きな、自然なバトンの譲り渡しを習慣づけるような意識的な、不屈な操作が決定的に必要である。そして、その必要は、社会主義革命がはじまつたときからはじまるのではない。革命家が革命家となつたときから、すでに未来社会の方式がその全身に備わつていなければならないのだ。ひとりの青年を霊廟へひきいれることは未来社会へ向うそのようなみずみずしい新人の出現を阻止してピラミッドの礼拝者をつくりだすことに役立つが、しかし、あらゆるピラミッドの保持がそうであるごとくに、そこには必ず歴史の復讐が起らねばならない。われわれの背の高い、痩せた青年は、真上から蒼白いレーニンの顔を眺めおろして、さて、そこから動き去ろうとするとき、ふと異様な、奇怪な、怖ろしい想念が、その敬虔につつまれた薄暗い感情の隙間を縫つて矢のように飛びゆくのを感ずる。》

この文章は、46年以上も前に埴谷雄高が書いた『永久革命者の悲哀』（「群像」31年5月号）の中の一節である。ロシア民衆が蜂起したロシア革命は、革命後わずか7年で死去したレーニンの遺体を棺の中に横たわらせる霊廟を産みだした時点で、革命のもつあらゆる可能性が潰え去ったことがここに記されている。もちろん、棺の中に横たわっているのはレーニンの遺体だけではなく、革命そのものの遺体でもある。霊廟ほど、支配が革命に取って代わったことを露骨に剥き出しているものはなかった。スターリンはマルクスやレーニンの言葉を自己の支配に役立てただけではなく、レーニンの遺体まで役立てたのだ。霊廟はレーニンの遺体と共に、彼やマルクスの言葉（個性的な観念の体系）を葬る場所でもあり、支配のイデオロギー的道具としてのマルクス主義・スターリニズムを刻印することになったのである。

よく知られるように、レーニンは『国家と革命』の第1版あとがきにこう記した。《この小冊子は、1917年の8月と9月に書かれた。私にはすでに、つぎの第7章「1905年と1917年のロシア革命の経験」の腹案ができていた。しかし、私は表題のほかには、この章の一行も書けなかった。政治的危機、1917年の十月革命の前夜が、これを「妨害」したからである。このような「妨害」は、よろこぶよりほかはない。しかし、この小冊子の第二分冊（「1905年と1917年のロシア革命の経験」にあてられているもの）は、おそらく、ずっと延期しなければならないであろう。「革命の経験」をやりとげることは、それを書くことよりも愉快であり、有益である。》（岩波文庫版）

レーニンが47歳の時であり、「ペトログラード 1917年11月30日」の日付が刻まれている。90年近く経過したいまでも、まるで革命直後の熱気の中で仕上がってきたてのほやほやが届けられたような匂いが付きまといている。革命なんてものは、なによりもやってみるもんだぜ、というレーニンの得意に満ちた声がそこから聞こえてきそうな気がする。「『革命の経験』をやりとげることは、それを書くことよりも愉快であり、有益である。」このレーニンの言葉に魅了されて、1970年代初期、日本の若者が革命を経験するために、海外へ飛び立った。「よど号」グループもその一員であった。それから30数年が過ぎて、レーニンが革命直後の高揚感の中で語った「革命の経験」と一切結びつきそうもない日本人拉致問題の中に、彼らの顔が大きくクローズアップされている。しかし、生前のレーニンとは一切無縁であったにちがいない日本人拉致問題の源流がレーニン廟にあることは明白であろう。

さて、「『革命の経験』をやりとげることは、それを書くことよりも愉快であり、有益である。」と記したレーニンは、こともあらうに、彼の遺体が霊廟に安置されるという「革命終焉の経験」を死後、味わわされることになったのだ。「レーニンとは、何か。新しい歴史の1頁を開いたレーニンとは、何か。私は、レーニンはただ一揃いのレーニン全集のなかにいて、そのほかの何処にも見出せない」と、埴谷雄高は断言する。「革命の経験」の途上で倒れたレーニンは、「一揃いのレーニン全集」の一行ほども「革命の経験」をやりとげることはできていなかったということだ。「レーニンとは、何か」を問うことは、革命とは何かを問うことにほかならない。レーニンは一揃いのレーニン全集の中にしかないということは、レーニンの構想した革命はロシアの大地の上に遂に着地しなかったということである。そんな彼の遺体だけが永久保存されて、愚劣にも「革命の経験」の終焉に役立てられていったのだ。

「革命は、古い制度の打倒にとどまらず、古い制度にまったく支配されぬ新しい人間の創出が目的」であるのに、「ひとりの青年を霊廟へひきいれることは未来社会へ向うそのようなみずみずしい新人の出現を阻止してピラミッドの礼拝者をつくりだすことに役立」たせようとする。「革命の経験」の終焉は、革命が目的とする「新しい人間の創出」を阻止するためにレーニンの木乃伊が持ちだされるかたちをとって明らかにされていき、そのレーニンの木乃伊は権力構成の廻廊がそうであるように、ありとあらゆる秘密によって支えられ、幾層もの暗黒状に囲われていることがぐっつきりと浮かび上がってくる。

《それは、秘密がもたらす奇怪な暗黒の翳りである。階級の上部はその特有な秘密を保持する。古代の僧侶のように。秘密は権力を保つ有力な武器であるが、しかしまた、その秘密自体によつて復讐される。ヘロドトスによれば、貴族の婦人の木乃伊化をひきうけたエジプトの木乃伊づくりのあいだでは、屍姦が行われたといわれる。そして、ほかならぬレーニンについて低い囁きから囁きへ伝えられる浮説が流布されることは、腹立たしい悲痛といわねばならない。一つの浮説によれば、棺のなかに横たわっているのは、

レーニンの頭部と両手だけであつて、切断面から内部の或る腐敗し易い部分がとりだされ、そのあとは封蠟状の物質で充たされているとのことである。このような実証しがたい臆測が生れるのは、関係者たちが秘儀に立ち会つた僧のように沈黙を要求され、あらゆる技法は神秘の幕につつまれ、その木乃伊製作の秘密が公開されていないからである。（中略）それが起るのは覗きこむ部分が秘密の暗黒に充ちており、その暗黒のなかにしかととらえがたい微妙な犯罪の匂いが直覚されるからであるが、しかも、そのような隠秘な臆測に敢えて立ち向つて、なお、このような遺体を棺のなかに横たえるのは、ただただ、権力をもつたピラミッドの上部機構が自己の擬制を必要とするからである。霊廟が手を触るべからざる礼拝の対象として習慣化されてしまうと、ピラミッドの上部もまた手を触るべからざるものとして習慣化されてしまう。赤い広場の霊廟、それは擬制のためのひとつの空間であるが、さて、そこに横たわった簡素な服装のレーニンの隣りに、元帥服を着たスターリンがさらに横たわることになつた。さて、この元帥服こそは、革命と未来の無階級社会とさらに自身へ向つての公然たる侮辱である。》

埴谷雄高はそう続ける。権力機構のピラミッドの上部にレーニンの遺体を置くことによって、その上部を支えるピラミッドの末端までが遺体と等しい存在になることが要請されている。遺体の礼拝者は自らを精神の遺体とすることを避けられないからだ。遺体の権力への収奪は当然ながら、レーニンの隣りにスターリンが並ぶというかたちで遺体の序列化を押し進めるが、埴谷雄高はスターリンの元帥服に目をとめて、こう批判する。《お前はいちど着た元帥服が脱げなくなつてしまつた。お前はいまこそ理論をもつて、ただひたすらその理論の深さによつて、現在に向うとともに未来をもその現在からひきだしてこなければならないのだが、お前は元帥服を着つづけることによつて未来を拒否している。スターリンよ、スターリンよ、お前はお前の先行者が与えた教訓を忘れている。新しい世代は、あらゆる制度、あらゆる機構、あらゆる思考法をもつて前向きに習慣づけられねばならないことを忘れている。お前の先行者は荒野に投げだされた予言者のように理論をもつことしか許されなかつた。理論によつて、ひたすら理論によつて、彼はひとびとを集めなければならなかつた。だが、第二のひとであるお前は第一のひとの結集した組織と機構のなかで、第一のひとに奉仕することや第二のひとびとを語らいあわせることなどによつて、つまり、理論のみによつてではなく或る種の意識的乃至無意識的な徒党化によつて、権力をもつことに慣れてきた。お前はひとびとのなかでなく、党のなかだけに生きてきた。あらゆる組織の硬化と墮落は、この第二のひとびとが広い荒野の視野を失つて、その階段をもつた組織と機構のなかにのみ眼をそそぐときに生れる。無能と追従とへつらいと茶坊主は、つねにかかるときに生れる。（…）危険はただにお前が元帥服を着て革命家としての自身を拒否していることのみにあるのではない。お前の元帥服は、この広いクレムリンの全部に容れても容れきれないほどの他の革命の汚辱をも含んでいるのだ。》

スターリンに元帥服を着せるのは、現実における革命の困難さである。だからこそ、その革命の困難さに取り組み、風穴を開けて未来につなげていくために、スターリンは現実が要請する元帥服を拒否しなけりななかつた筈だ。ところが、彼は「元帥服を着つづけることによつて未来を拒否した」のである。この世のどこにも範を求めることのできない未知なる革命に直面していたレーニンは、いまある現実のどこにも足を下ろすことができなかつたが故に、自分の足を下ろすことのできる理論を必死につくりだそうとした。その「理論によつて、ひたすら理論によつて、彼はひとびとを集めなければならなかつた。」革命の現実は革命の理論から生まれてこなければならなかつたからだ。しかし、スターリンは第一次革命によつて国家権力が奪取された現実に深く足を下ろそうとし、革命の理論は現実を拘束する理論に取つて代わられ、未来は閉ざされることになつた。

金正日もまた、軍服を好む者である。軍服を着て人々を支配する「権力をもつことに慣れてきた」。常に戦時下であり、戦時下の人々を置くために自らが率先して軍服を着つづけた。戦時下から解放される暮らしを願っている人々の現実を封印しつづけるために、彼は軍服を着つづけた。人々の中で人々の一人として生きていたなら、軍服こそが最もふさわしくない服装であることにすぐ気づいた筈だ。スターリンと同様、金正日もまた、「ひとびとのなかでなく、党のなかだけに生きてきた」ことを、このことは示している。そこに見出せるのは革命家の貌を全く喪失した権力者の貌である。権力者は自らの権力基盤を人々にではなく、党に求めるからだ。人々の声と顔を見失つて、「階段をもつた組織と機構のなかになのみ眼をそそぐ」のは、「よど号」グループもそうであり、人々のみえない「党のなかだけに生きてきた」彼らに馴染んでいるのが、「無能と追従とへつらいと茶坊主」であっても、「荒野に投げだされた予言者のよう」な孤絶の革命家ではないことはもはや歴然としている。

《スターリン自身の分析によつてそれほど重要でないその元帥服を、ところで、私がここで何故このように強調したかといへば、(…)それは、この元帥服もレーニンの遺体と同様にピラミッド体制の犠牲者として用いられているからである。元帥服を着たスターリンの写真がデモンストレーションの列中に掲げられることは、勿論、スターリン自身の汚辱である。しかし、より大きな汚辱は、スターリンの写真を掲げることによつて自身の位置を掲げようと絶えず試みる大ピラミッドや中ピラミッドや小ピラミッドの尽きざる体制のなかにある。真犯人は絶えず表面の犯人の蔭に隠れようとするのだ。大きな顔に引きのばした写真を掲げて進んでいるデモンストレーションの行列は、遠い未来の眼をまたずともここ数十年の裡に、恐らく、最も愚劣な見せ物となるだろう。私は齒がみする憤懣と闘志をもたずにこの大きな顔の写真を掲げている行列を見ることはできない。それは、選挙の馬鹿騒ぎを思わすが、働くものの創意の圧殺がこれほど堂々と白昼のなかを示されている光景を、私はほかに知らない。もし写真が掲げられるならあら

ゆる種類の働くものの姿が多く工夫と創意をもつて示さるべきであるのに、そこには、一枚の働くもの自身の姿も見当らないのである。何故か。ピラミッドの体制が大衆に向つて自己の支配を要求し貫徹する手段として、このデモンストレーションまで抱きこむからである。》

スターリンを覆っている彼の元帥服は肖像写真として、「大ピラミッドや中ピラミッドや小ピラミッドの尽きざる体制のなかに」掲げられることによって、すべてが権力に収斂していく大いなる効果を発揮する。レーニンの遺体が未来へ向かう「新しい人間の創出」を阻止するように、「元帥服を着たスターリンの写真」もまた、ピラミッド体制のデモンストレーションの隊列からたえずはみだそうとする秩序破壊者を抑圧する。ここで葬られているのはかつての革命の記憶だけではない。未来に足を踏み入れていく革命の記憶も根こそぎにされようとしている。ピラミッド体制の頂点に位置するスターリンは自らの写真を掲げさせることによって、ピラミッド体制をあらゆるデモンストレーションの列中に持ち込む。ピラミッド体制の支援、確認の行動に堕しているデモンストレーションにはしたがって、「働くものの創意」のみならず、革命の未踏に向かって「働くもの」が深く見失われてしまっているのだ。革命の途上で「働くもの」だけでなく、「働くもの」であることが革命的であるということも、ピラミッド体制の中で圧殺されてしまっている。

《私がむらむらと苛らだつてくるものとして、このピラミッドの掲げる肖像写真のほかに、さらにもうひとつのピラミッドの姿勢をとりあげよう。革命記念日やメーデーの日の赤い広場の写真を見ると、何時も、祭典の祝福と祭典の汚辱をそこに同時に見なければならぬ重い苦痛に私はひきさかれる。(…)私を苦痛にひきさくものは、閲兵である。そこには、数千年にわたつて支配者が被支配者を閲兵してきた常套的方式とまったく同一の方式しか見られず、壇上に並んだ閲兵者の前をデモンストレーションの列が行進している。大臣という名称の代りに、人民委員という名称をとることにしようと、レーニンが提唱したのは、単に名前の変更を意図しただけの意味ではなかつた。新しい歴史の一頁は、あらゆるものが新しい姿勢をもつて、やがては、支配と服従なき社会へ躍りこめる潑刺たる踏み切りの姿勢へまで移りゆくところに発しているが、そこでは、あらゆるものの姿勢がもはや過去と異なつていなければならない。新しい頁のなかの絵と古い頁のなかの絵と重ねあわせてみると、一見、重なりあうように見えながら、しかも、精査すれば、劃然と異なることが明らかになるといつた具合でなければならない。そこに二つの写真を並べて、もし説明文をつけなければ、どちらとも解らぬような構図があれば、それは歴史への恥辱である。祭典は、過渡期に於いても、すでに交歓の性質をもっている筈である。行進者を迎えるものは他の行進者であり、或る地区の居住者であるが、その迎えるものが、さらに、他の場所で迎えられるものになるという交歓の方式について創意をこらすこと、そのことこそ、あらゆる都市、あらゆる地区に於ける祭

典の原理になつてゐる筈である。それは、革命の祭典であり、未来へ向う祭典である。革命への貢献者の名が刻まれている赤い広場も行進は通る。だが、そこで閲兵されるのではない。赤い広場の壇上に立つてゐる者はなく、すべてが行進の列のなかにはいつてゐるのだから。(中略)ここには、ピラミッドの否定の姿勢が見られない。ピラミッドの体制を誇示し、強化する数千年来の帝王の閲兵の形式しか見られないのだ。何故数歩降りないのか。私はつねに疑わしく思うが、閲兵者はこのような高い壇上に数時間も立ちつづけているあいだに、自己の革命家としての喪失を一瞬も覚えないものだろうか。》

レーニンの遺体を奉る霊廟も、スターリンの元帥服も、プラカードの間に掲げられてゐる肖像写真も、革命記念日やメーデーの日における赤い広場の壇上に並んだ閲兵者の前を行進するデモンストレーションの光景も、すべてピラミッド体制の誇示そのものであり、《このピラミッドの体制の重さは、砂漠のなかのピラミッドが人類を眺めおろしているよりも長く、数千年にわたつてわれわれの精神の秤の一片の上に乗つていて、それにつりあう他方の一片に服従の美德と秩序の習慣と思考の抑制の数えあげがたいほど多くの組合せを置きつづけてきたのであるから、それを顛覆するためには、砂漠のなかのピラミッドを片手でつぎつぎにひつくりかえせるほどの力が要る。それは、部分的な力では倒れない。未来の全体を掌のなかに握つて、全力をあげ、懸命に打ちつづけなければついに傾かないのだ。》

ここで語られてゐる革命は、人類の発生当初から延々と築き上げられてきてゐるピラミッド体制の転覆そのことに視線が注がれており、16世紀以降の帝政ロシアの専制政治体制を打倒して、レーニン率いるボリシェヴィキが政権を掌握したことが歴史的にいかに画期的であつたとしても、ピラミッド体制の転覆という人類史上最大の課題の前に立つなら、露払い程度の意味しかもちえていなかったことを今更ながらに思い知らされる。ロシア革命はマルクスたち先達が構想した、資本主義社会に至るこれまでの人類史における前史と異なつて、人類が真に歩むべき歴史の始まりとしての社会主義革命を遠くから、あまりにも遠くから一瞬垣間見たかもしれないが、これまでの記述からもわかるように、革命を持続させていく現実的な条件の恐るべき貧困から現実と妥協し、独裁的全体主義の収容所群島国家へと後退していき、ソ連圏崩壊の歴史的必然の帰結を辿ることになった。

革命の理論的支柱であつたレーニンは革命のわずか7年で死去したが、おそらく死の直前まで遠い革命に至る現実的な条件を一步一步築こうとしていた思いが、『国家と革命』の中に小さく書き留められている。これはすでに埴谷雄高によつても取り上げられているが、1871年のパリ・コンミュンの20年後、エンゲルスは次のような総括を行っている。

「国家と国家機構とが社会の従僕から社会の主人に転化するのとは、これまでのどの国家でも避けられないことであつたが、コンミュンは、この転化をふせぐために、二つの

誤りのない手段をもちいた。第一に、それは行政、司法、教育上のあらゆる地位につくものを、関係者の普通選挙権にもとづいてえらび、しかも同じ関係者がこれをいつでも解任できることとした。そして第二に、それは、地位の高低を問わず、あらゆる勤務にたいして、他の労働者たちがうけとる賃金だけを支払うこととした。一般にそれが支払った最高の俸給は6000フランであった。これによって、獵官運動や立身出世主義をしめだすたしかな^{かんぬき}門がかけられたわけであった。なおそのうえ、いろいろな代議機関への代表にたいする拘束的委任の制度がつけくわえられたが、そうするまでもなかったのである。」(『フランスの内乱』)

この「6000フラン」にレーニンは小さく附記して、「名目的には約2400ルーブルであるが、今日(1917年8月)の相場では約6000ルーブルとなる。国家全体にたいして最高6000ルーブルを採用すれば十分なのに、たとえば市議会で9000ルーブルの俸給を提案しているようなボリシェヴィキ党員の行動は、まったくゆるしがたいことである。」と、苛立ちと憤りをあらわにした。革命後の国家機構の勤務に就く者はエンゲルスがいうように、「地位の高低を問わず、あらゆる勤務にたいして、他の労働者たちがうけとる賃金だけ」を受け取るようにしなければ、「獵官運動や立身出世主義」を制度とする資本主義国家と全く変わらないではないか、とレーニンは独り叫んでいたのだ。

埴谷雄高はこのレーニンの叱責に、「新しい特権的な官僚制度の発生」に対する「一抹の暗い不安」(『革命の意味』 - 『中央公論』34年11月号)を見出しているが、実際、革命後の政権の座に就いた者たちが他の一般労働者たちよりも多くの俸給を取って、立身出世主義を志向するのであれば、「支配と服従のない共産主義社会」を目指す革命の理念はそこで否定されたことになり、打倒した支配者に新たな支配者が取って代わったにすぎなかった。引き続く革命の事業には全住民一人一人が等しく参加することが要請されていたのであれば、その中で俸給の高低による差別が設けられてはならなかったし、革命の理念はその現実にも貫かれていなければならなかった。革命を求めて北朝鮮に飛び込んだ「よど号」グループは、もし彼らがレーニンの叱責の中にあらわれているような革命の理想を抱きつづけていたのであれば、自分たちが金父子によって歓待され、働きもせずに、一般労働者の味わえない贅沢な暮らしをずっとさせてもらっていることの不思議を自問すべきであった。

ところで、朝日新聞コラムニストの船橋洋一がソ連崩壊のレーニン廟について『週刊朝日』(02・12・20)の中で記している。レーニン夫人のクループスカヤがレーニンの死体をミイラにすることを決めたスターリンに対して、そんなことに金をかけるならもっと「保育園や学校、住宅などを建ててほしい」と主張して強く反対したことや、53年のスターリンの死後、レーニンの隣に安置されたその遺体はフルシチョフのスターリン批判を経て、61年、レーニン廟から運び出されたこと、プーチン大統領はレー

ニン廟には参拝していないことなどに触れた上で、なぜ、現在もレーニン廟が存続しているのか、廟の警備司令官に尋ねている。

新聞にはレーニン廟を取り壊すべきの声が何度も載ったが、そのたびに国民の中から反対の声が上がり、「へたすると国論が真っ二つに割れる恐れ」があるという。ソ連時代は年間150万人がレーニン廟に参列し、いまでも毎年、100万人は下らず、97年の世論調査では48%が埋葬支持、38%が反対で、「その年、エリツィンは埋葬をにおわしたが、ジュガノフ共産党委員長はただちに、レーニン廟前に何万人もの党員を動員し反対大集会をすると威嚇。エリツィンは尻込みした。この国はいまでも共産党の支持率が30%近い。」クレムリン直属の機関である「クレムリン生物構造センター」によって死体に防腐処置が施され、ミイラにされるが、このミイラ技術はソ連の得意芸で、モンゴルのチョイバルサン、ブルガリアのディミトロフ、チェコスロバキアのゴットワルト、ベトナムのホー・チ・ミン、アンゴラのネットなどの各国の独裁者の死後、“ミイラ外交”を進めた。「唯一、この面で自力更生路線を貫いたのは毛沢東を水晶棺に納めた中国である。」

ソ連崩壊後、センターへの国家予算は8割減らされ、金日成のミイラ化請負では一説には30万ドルの実入りがあったといわれるが、商売はあがったりで、「典礼サービス」という会社をつくって、「主にロシアマフィア相手のビジネスに切り替えた。殺されたメンバーの死体の整形、とくに顔の整形や水晶棺の製作、などの注文が多い。」こう説明した後、「レーニンのミイラの“死に様”は、ソ連がいつまでも死にきれない“生き様”を映し出している。それはいまだに歴史になれないソ連共産党という体制と時代のミイラでもある」と書くが、ソ連崩壊後のレーニンのミイラはロシア革命と共に全くの過去の記念物に納められてしまった感がある。

それにしても、ソ連を始めとする各国のスターリニズムが^{けいがん}猛威を振るっている中での埴谷雄高のレーニン廟にスターリニズムの本質を見抜く炯眼には戦慄を覚えるほどだが、「ひたすら首領のために生き、青春も生命も喜んで捧げる」とか、「キム・イルソンの教示（教え）は法として至上の命令として受け止め、どのような些細な理由も口実もなく実践し、これを守り抜かなければ死ぬ権利もない」という言葉を全員で唱和したりする「よど号」グループの革命についての学習がいかに革命の本質と無縁で、バカな人間を育成するための、要するに、ピラミッド体制を強固にするための愚劣な訓練にすぎないかが鮮明に浮かび上がってくる。戦前、戦中の「御真影」から見下ろされる青年期を過ごしてきた埴谷雄高は、レーニンのミイラや元帥服のスターリンの肖像画（写真）がいかに革命を圧殺する愚劣なものであるかを、自らの体験をもって鋭く見通していた。革命がより強固な支配の道具に取って代わるスターリニズムの闇が、現実と妥協しながら生きる人間の屈服した姿からやってくることを凝視していたのである。

2002年12月21日記